



京都の民主運動史を語る会 会報 題字 住谷悦治

代表 岩井 忠熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込口座番号〕

01060-7-15762

加入者名 燎原社



中村 修三 画

私の京大事件と

映画「わが青春に悔いなし」(上)

小畑 哲雄

「真贋」判別には「階級的観点」

村島 昭男

正 誤

総会予告

『煙』の柱だった児玉誠さん

加藤 豊

同人誌『煙』のこと

川合 葉子

永田忍さんと非核平和の運動

望田 幸男

燎原 文芸

黒住 嘉輝

編集後記

私の京大事件と 映画「わが青春に悔いなし」(上)

小畑 哲雄

映画「我が青春に悔いなし」は戦後間もなく封切られて、そのころの私たちにとっては感銘の深い映画でしたが、私にとっては、特に個人的に忘れることのできない思い出があります。それは、今から五十一年ほど前、一九五一年の二月の初めに、京大の西部講堂でこの映画が上映されました。一回目の上映が終わって、幕間に、私はステージに立ちました。それはその前の日に、二十三日目自由の身になって、出獄のあいさつをするためでした。その時に私の発した第一声が、「歴史は繰返すということばがあります」というものでした。そしてら会場がどっと沸きました。というのは、この映画に出てくると同じような、警官隊が大学の中に入ってくる場面がこの、私が逮捕されている間に起こったわけでありませう。そういう意味でこの映画は、たいへん忘れることのできない映画なのです。

の多いところでして、戦後だけでも四九年には「病院事件」、それから、「前進座事件」、それから、五年の「天皇事件」、それから「荒神橋事件」、こういう一連の「事件」がありました。私は同学会という全学自治会の役員をしておりまして、五年の「天皇事件」で、責任を問われて無期停学になりました。五三年の「荒神橋事件」の時は、関西学連の委員長をしていまして、現場で、いろいろ特に警察との折衝なんかもやりました。

ここでいう「京大事件」というのは、「天皇事件」と、私たちは呼んでいます。その当時のマスコミの書き方はどうなっているかというところの資料を調べましたら、ほとんどが、「京大デモ事件」、あるいは「プラカード事件」、そういうふうになっています。五十一一年前の一九五一年一月の二日にこの事件は起こったんです。インターネットで、そのころの国会の議事録を見ました。「京都大学

で引いてみますと、まず翌一三日の衆議院本会議の冒頭に天野文部大臣が、昨日、天皇が京大に行った時に、事件が起こったということとを報告します。以後舞台は法務委員会に移ります。「京都大学」で引くと、文教委員会、文部委員会ではなくて、ほとんど法務委員会なのです。

これは、一九五一年の一月一日に昭和天皇が京大を訪問したときに起こったとされる事件なのです。私らは「事件」だと思っていなかったのです。むしろ、天皇が出ていったときには、何事もなくすんでよかったな、というふう

に教授たちも、学生たちも思っていたそうです。「そうです」というのは私は現場にいなかったからなんです。私がかかわったのは、その二日前までで、その当時私は同学会の総務部中央委員代行でした。同学会というのはおもしろい組織で、自治会なのですが、運動部や文化部など、そういうものを全部、傘下に治めている一種の学友会的な組織でもあったわけで、その中で、いわゆる自治会としての役割をやるのが、総務部というところなのです。総務部中央委員というのは、普通の大衆組織でいえば、書記長の仕事に当るでしょう。委員長が

経済学部の三回生で卒業を前にして、事実上引退し、役員の改選期にきていたのです。で、武田君という、総務部中央委員が委員長代行になりました。その武田君の仕事が私が引き継いでいました。一月の一〇日に私は記者会見をしました。そのころは毎日のように記者が同学会の事務所に来るのです。京大の学生は天皇をどう迎えるねんという、なにか起こるのと違うか、とみな思っているのです。

京都でそのころ労働争議がさかんだったのは、京都の市役所です。市役所入口の所に、大きな組合の掲示板があって、これをはずせ、はずさんでもめとったんです。それから島津製作所、これは、年末手当や賃上げを含めてストライキを構えていました。ストライキの最中に天皇がきたら困る、というので、このときは会社が折れて、大幅賃上げをしたのです。それで、島津はかたづけいたのです。問題は京大や、ただではすまんやろう、とみな思っているわけです。私は同学会のスポークスマンでもありませんから、天皇が京大に来ることを歓迎しなければ拒否もしない、どうしても来るのだったら、ありのままの京都大学を見てもらいたい、ということだけがわれわれの態度だ、

といったのです。

もう一つ決めたことがあったのです。それは天皇に対するわれわれの気持ち、公開質問状という文書で出そう、ということ。公開質問状を書いた人物が原稿をもってきた。なかなかの名言やな、といって私がひよっと見ると宛名が書いてないのです。宛名を書こうとしてびっくりしたのは、日本には苗字のない人が一人だけいることがわかったのです。そこで私が、「天皇裕仁殿」と原稿に書いて、印刷に回すようにして、僕はその日、円山公園で開かれる全日自労の集いに激励のあいさつをするために出かけました。

その前の記者会見の終わった後に、新聞記者の一人が「小畑さん、あんな逮捕状でてるで」と、いうのです。そんな覚えはないわ、と言ったんですが、同学会をだますと、ちようど大学の本館の前なんです、その石の上に若い男がすわってました。私が出てきますと、すつと立って私のあとについてくるのです。そのころは、戦後ですが、それなのに尾行があたり前みたいな時代でしたから。あ、今日は護衛つきやな、と思ってたんですよ。ま、いっぺんこいつをからこうてやろうと思って、わざと止まりま

した。そうすると、向こうも止まるんです。何と尾行のへたくそな刑事やな、と思った。私が長いこと止まっているものだから、むこうもしょうがなくて、私を追い越していきよった。で、大学の正門を出たら、吉田分校の正門の前で立ちどまって、こちらを見ているんです。あ、これはおかしいな、

と思った、大学の守衛の詰め所から、私たちと顔なじみの川端警察の、いわゆる京大係の渡部五生という刑事が出てきて、「小畑君、小畑君、あなたに逮捕状出てる、東一条の派出所にあるから、来てくれるか」というので行きました。見たら、「暴力行為等処罰に関する法律違反容疑」と書いてありました。「そうか、しょうがない、逮捕状が出ているのなら行くけれども」、これ二回目ですよ、逮捕歴は。で、行くけれど条件がある、一つは手錠をはめないこと、もう一つ、トラックやジープでなくて乗用車をまわせ、と言ったんです。そしたら、回して来ました。京都市警本部から、外車でしたよ、あのころ日本の車でラジオがついているのは珍しかったんだけど、サンフランシスコ・シールズというアメリカの三Aのオドウル監督の率いるプロ野球のチームが日本にやってきて

野球の試合をやっている、その試合の実況を聞きながら、京都市警本部に入ったんです。あのころは、普通はジープかトラックに放り込まれるんです。最初、私が大津で放り込まれたときは、チャップリンの「モダンタイムズ」と同じように、まるで蹴り込まれるように

して、逮捕されたことがありませんから、それから思ったら、まったく違ってふんぞり返って、両方に刑事二人控えさせて、入ったわけですね。(以下次号)

(おばた てつお)

京都平和委員会常任委員)

「真贋」判別には「階級的観点」

村島 昭男

若い頃、鳩を飼ったことがある。餌のトウモロコシや小麦など、金槌で叩かないと砕けないほど硬かったが、鳩は噛みもせず胃の腑に呑み込み、栄養として消化していた。勿論、胃液を分泌してのことだが、この穀物を分解・消化する酵素のようなのが、人間にもあったら、今日、洪水のような情報を選び分け、解析し、ガセネタと本物を見分け、判別し、行動の糧となるのにと思いうのである。

私はこの春、所属している組合の大会で、ある代議員の発言に呆然とした。自ら加入し、自ら参加してきた組合の、運動や方針にこ

とごとく反対だといふのである。それが自己否定であり、論理矛盾だと思わないのは異常だが、この人に限らず、これが今日多くの人の置かれている現状なのだと思いつたとき、事態の深刻さにくら然としたのである。

マスメディアの流す情報に水びたしにされた脳髓からは、こんな発言しか出てくる余地がなかったのである。

昔、国民生活の一切を監視・統制し、権力に不都合な思想を弾圧、目隠しにして、鑄型にはめ、服従と戦争への参加を強要したのは、絶対主義天皇制下の軍隊と警察で

あり、治安維持法を中心とする、弾圧諸法であった。

今その役割を負っているのは、マスメディアによる情報操作であり、ふりまかれるガセネタの情報である。

もちろんウソばかりとは言わないが、漱石の言葉通り「天下の泥土を集めても金にはならない」類いのものである。九牛の毛の中に一毛の本物を見つけたのは、浜の真砂の中に一粒の真珠を見つけたよりも至難である。

たとえガラクタの奥に、ちよつぱり真実が混ざっていてもそんなものが目にとまるためしはなく、くり返されるガセネタだけが人々の頭の中に残留し、世論を形成すると言う、巧妙な仕掛けが施されているのだから、なんとも恐ろしい話である。

このマスメディアによる情報が、一段と字離れを加速させ、まともな「本」を読まないという風潮をつくり出し、耳や目を通じて入ってくる情報が、知識の大半を占めるといふ状況を作り出している。

この一方通行で入ってくる「受身の情報」には、事物を自らの頭で考え、検討し、判断するという「能動性」が働く余地がなく、大切なコミュニケーションが存在しないという、致命的欠陥を持つのである。

しかもこのガセネタの情報が刷り込まれて、あたかも自分の意見のように居座る所に情報社会の恐ろしさがある。

今日、労働組合に組織されているのは二割しかない。その労働者にしてこの有様だから、この状況を打破するには、余程の工法と努力を必要とする。

そこで鳩の餌に戻るが、人間にも情報を選び分け、その真贋を分別する定理や法則があるはずだ、鳩の胃液ならぬ消化酵素、それは「階級的観点」であると思う。

マルクスの学説通り、人間社会は階級社会であり、その利害に基づいて政治や経済が動いている、この厳然たる事実を尺度にして事象を解析すれば、事物の本質は見抜ける。

階級的観点とはすなわち科学的観点であり、現実に生起する事実を、弁証法的に推し計る、普遍的な思考の論理である。

ところが、社会事象を解析する物差しとしての階級的観点など、学校教育ではひた隠しにされ、この定理や法則から遠ざけることばかりが行なわれている。藤岡たちの「自由主義史観」とやらの、歴史偽造の「新しい歴史教科書」はその尖兵・誤導の役割を負うものである。

である。

ではどうして多くの人に、階級的観点を正しさを知ってもらおうかである。それにはまず「己を知る」(ソクラテス)とか「自己をならう」(道元)とかの、自分自身の階級的立場を知る事である。そしてこの物差しを使って、現実の事実を解析してみよう。

テキサスのならず者ブッシュが本当に、イラクの「大量破壊兵器」を人類の安全と平和への脅威と考えて、戦争を始めようとしているのか、「否」である。ブッシュは他ならぬテキサスの石油資本の利益代理人であり、イラクの埋蔵する石油権益を手にする為、何としても戦争がしたいのである。

自・公が憲法の基本原理である、平和、国民主権、人権、福祉をふみにじる、「有事立法」を推進しようとするのも、米日支配階級の世界支配とその体制維持を狙ったものである。拉致事件の扱いも、党利党略の階級性が露骨ではないか。この様に階級的観点に立てば、マスメディアの情報の奥に隠された、そのねらいと真相が見えて来るのである。

人間も鳩にならって、階級性という消化酵素を活用し、現実を科学的に解析し、だまされない様に、そして社会進歩に役立てよう。

(〇二・一二・一四)
(むらしま あきお)

正誤

前号「フランス」の筆者水野勉を水野秋に改め(みずのあき 新労働通信社代表)と訂正します。水野氏と読者におわび申しあげます。

京都の民主運動史を語る会 二〇〇三年度総会案内

会員の皆様はもちろん会員外の方たちの講演聴講を大歓迎しますから、おさそい合わせて御出席ください。

六月二一日 一時三〇分〜三時三〇分 京都教育文化センター

小講演「アメリカとイラク問題」(仮題)

田北 亮介氏(龍谷大学名誉教授)

議事……会計報告・決算・予算・活動方針・人事・その他

『煙』の柱だった児玉誠さん

加藤 豊

『煙』という同人誌があった。一九六五年に創刊され、二十三年間に五十三冊が発刊されている。

この雑誌は、治安維持法で弾圧された京都在住の人たちが、その体験を綴り、編み続けたものである。これによって私たちは、遠く遙かに震んでいた伝説の時代の禍々しい事実を知ることができる。

いつの場合もだが、あらゆる営みには、必ずそれを支え、人知れぬところで払う苦心を厭わない人があって、実を結ぶものである。『煙』の場合のその人は児玉誠さんであった。彼の献身があってこそと、同人すべてが等しく認めるところであったという。

児玉 誠——一九〇二(明治三五)年一月五日、京都府与謝郡加悦町に貧乏士族の三男として出生。尋常小学校を卒するとすぐ大阪へ。船場の丁稚、新聞配達など底辺ばかりを歩いた。一九三一年日本共産党に入党。「戦旗社」「作家同盟」

で活動した。戦後、京都へ移り印刷所を開業した。

一九五四年のことだった。貧乏学生で汲々としていた私に、親しくしていた学友の宮階延男君が自分のアルバイト先で働けるよう口聞きしてくれることになった。円町の山陰線のガード下の道をたどって着いた先が「こだま印刷所」だった。それが私と児玉のオヤジさんとの出会いだった。

孔版(謄写版)の筆耕として雇われた私とは、言ってみれば親方と徒弟の関係になったのに、児玉さんはついぞそんな素振りを見せたことがなかった。なぜか私を可愛がってくれた。それは決して私を特別扱いはしたのではない。誰に対しても尊大な振る舞いをする人ではなかったのである。

どうにか学校を出て大阪で働いていた私のもとに『煙』が送られてきたのは、それから十数年後のことである。それによって私は児

玉さんの戦前の命懸けの闘いをつぶさに知ることになる。

児玉さんは戦後再入党したが、コミンフォルム批判で党が分裂したため離党した。壊滅させられた党が白日の下で活動できるようになったというのに、内部抗争に明け暮れる姿に耐えられなかったのだと思う。

無産者芸術連盟(ナツプ)の機関誌であった「戦旗」社やプロレタリア作家同盟で活動した経歴からも分かるように、児玉さんは文学の道への強い思いを抱き続けてきた。中野重治との交遊もあり、「啄木研究」「関西歌人」などに作品を発表し、晩年には詩集「いたち」を上梓している。ペンネームの緒方唯史の由来は、「我が思うこと大方正し」のシャレだと自ら語っていた。

『煙』について松田道堆さんが触れた一文がある。「昭和初期の運動に挺身した人たちは、栄達を願ったり、人に媚びたりしなかった。そして人に目立たないことをひたすら願った。この雑誌が長く続いたのは、その美しさをいとおしむ人たちがいたからであろう」。

児玉さんはまさにその一人であ

った。私が激しい反戦運動にたずさわっていることを知っても、自分の経歴をひけらかしたり、自慢することなどついぞなかった。子どもさんたちに語ったことの一つにこういうことがある。

「特高の拷問を受けながら同志の名を出さずに耐えられたので、私は顔をあげて表を歩ける。しかしこれは幸運にもいべきであって、供述・転向した人々を責める資格は誰にもない」。

児玉 誠——一九八八年五月二七日没。八十五歳。その追悼特集をもって『煙』も終刊。

最後に、忘れてならないのは、児玉さんの家族の力である。

妻ひさえ、長男世志人・佳子夫妻、次男正人、孫国人さんたち一家をあげてこだま印刷所を守り続け、『煙』の印刷・発送作業を引き受けてくださった。『煙』全巻を大切に保存し、そのCD化を進めておられる。

ここにもまた人知れず優しく美しい人たちがいる。

(かとう ゆたか 高槻市在住)

同人誌『煙』のいづ

川合 葉子

父、梯明秀の遺品の中に、『煙』という雑誌の五三号、「終刊号」と書かれたものを見つけました。開いてみると私にとって懐かしい名前がそこそこに見られるのです。この号は二つの特集を組んでいました。前半は大田遼一郎さんの歌集『阿蘇』刊行前後の資料や、多くの方から児玉誠さんに寄せられた消息を集めたものでした。そして後半は「追悼児玉誠」となっていました。

巻頭に和田洋一さんが『煙』の終巻にさいして」という一文を寄せておられました。それによると、治安維持法の被害者で京都在住の人達が、敗戦後「京都旧友クラブ」という組織を作ったようです。その中の詩心のある方々が同人誌『煙』を一九六五年六月から出し始めて、同人の一人だった児玉さんが経営している印刷所で最初からこの終刊号まで出版してこられたことも分かりました。

『煙』を通じて消息を交わしてお

られた人々にとって、この雑誌がどんなに温かい心のよりどころであったか、児玉さんがどんなに優しいお人柄であったか、ということがこの一冊でもとてよく分かり、もっと『煙』について知りたくなり、ご遺族がどうしておられるのか知りたくになりました。

児玉さんに追悼文を寄せている人の中に、鴨沂高校の同期生だった加藤さんがおられました。

加藤さんにお願ひして、児玉誠さんのご遺族に引き合わせていただくことになりました。誠さんの長男の世志人さんが中心になって、いまも印刷所を経営しておられました。

二月にしては暖かい一日、加藤さんとごだま印刷所をお訪ねしました。世志人さん、佳子さんご夫婦が机に『煙』を一号から五三号まで全巻を積み重ねて待っていて下さいました。誠さんが『煙』の出版をどれほど大事に思っておられたかということ、ご家族がそれ

を支えていたことなどを伺うことができました。四〇号まではもう一部づつ残っているだけなので、いまこの『煙』の全巻をCD化する作業にご家族で仕事の暇を見つけて取り組んでおられるということでした。そうすれば誰もがパソコンで見ることができるようになります。

かつて治安維持法と闘った人々の思いが、五三号も続いた同人誌に残されていたことに、私はとても感動していたのですが、児玉家の家族の皆さんが誠さんの遺志をとてても大事にして、後に残すことを考えておられるのに、ほんとに感動してしまいました。

『煙』は、終わりの頃は五〇〇部ほど印刷しておられたようです。「毎年年末は『煙』を印刷、発送して、それから児玉家のお正月の支度でした。」と佳子さんが言われました。『煙』の思い出については、この『燎原』にご家族からご寄稿いただくことになり、児玉誠さんについては加藤さんにご紹介いただくことになりました。

児玉さんと『燎原』の関係はとても深かったのです。児玉さんは『燎原』の古くからの会員でした。古い号に会員便りのようなかたちで何度も寄稿しておられます。合冊

の『燎原』を持参して、そうご説明したところ、世志人さんは、「うちで印刷をしていたので、見覚えがある」と言われたのでびっくりしてしまいました。数年間印刷をしていたのだのです。『煙』には何号か『燎原』の広告を載せてもらっていました。児玉さんは初期の『燎原』を支えて下さったお一人でした。

現在『燎原』の編集は、こういういきさつを伝えられていない人達が引き継いでいます。ところが、『煙』五三号から始めた小さな探訪のおかげで、いまままで私達が知らなかった京都の運動が分かってきました。「京都旧友クラブ」にも会報があったようです。その会報や『煙』、児玉誠さんについて、もし思い出のある方がおられましたら、是非『燎原』の事務局にお便りを下さい。そこから、また、かつての運動が生き生きとよみがえるかも知れません。

(かわい ようこ)

京都市北区在住)



永田忍さんと非核平和の運動

望田 幸男

永田 忍さんが逝った。二〇〇三年一月一六日午後三時一〇分のことである。享年七十四歳であった。永田さんとは京都大学の学生の頃からの知り合いなので、長い付き合いになるが、人間同士の深い交流は、彼が宮崎大学を定年退職し、ふたたび京都に戻ってきてからである。

つたここ一二年、これら二つの分野が停滞気味になってきたのは、彼の存在がいかに大きかったか暗示している。

九三年の春のことだった。彼から電話があった。「京都に帰ってきたけど、なにか手伝うことない」と。こんな「セリフ」を絶えて久しく聞いたことのない私は「ここに百万の援軍来る！」の想いがした。早速、日本科学者会議京都支部と「非核の政府を求める京都の会」に関わってもらうことになった。永田さんは、科学理論とその社会的貢献、そして非核平和の運動を、その頭脳と心にまさに三位一体化したような人だった。それから十年、この二つの分野で、着実に、粘り強い彼の活動が展開された。彼が前立腺ガンで病床に伏すようにな

ここまでは主として「非核の会」における彼の活動について紹介しよう。彼は「会」の常任世話人として、ほとんど皆出席であった。それどころか事務局メンバーでないにもかかわらず、「ちよつと心配になってなあ」といいながら、しげしげ事務局会議にも顔を見せた。何のことはない、議論がしたいのである。酒はまったくというほど飲みもしないのに、会議後の飲み屋での議論までつきあつた。そんな議論に花を咲かせていた永田さんは、ほんとうに楽しげであった。というより存在感と生きがいを感じていたのだろう。

の理論活動の跡が刻まれている。やや年表風に列挙すれば、九五～九六年には、「フランスはなぜ核実験を強行するのか」、九六年には「もんじゅ事故はなぜおこったか」といったテーマについて論じている。九七年からは、原水協や科学者会議との共同シンポジウムを組織する中心になっていく。これは核兵器廃絶にむけて、反核理論とともに、情報を広い範囲で共有することを推進するためであった。また同年には「アメリカの未臨界核実験の狙いとその政治的役割」を、九八年には「インド・パキスタンの核実験問題」の解説をしている。九九年には「東海臨界事故と原子力行政」について論じている。二〇〇〇年には「北東アジア非核地帯化構想」を積極的に押し出している。この発想は当時は、まだ注視されていなかったが、最近の日朝交渉やいわゆる「北朝鮮問題」を見ると、理論的先見性をもったものといえる。

働いたことにある。典型的な例を挙げよう。九四～九五年に「非核の会」は、「平和カルタ」を作成し、その普及に取り組んだ。これは、文章は全国公募、絵はヨシトミヤスオと木川かえる、文字は松村香風となかなかユニークな産物だった。しかし、送料込みで二千円で広い範囲の人びとに購入してもらわねば話にならない。「会」の各役員も頑張ってくれたが、そのなかでひととき目立ったのは、永田さんの腰痛をこらえながらの活動だった。約四千セットが普及できた。ところが、この種の運動では、代金回収が一度不能になるのは常識であった。私を含めて事務局メンバーもそれは覚悟していた。だが、永田さんひとり、頑として最後まで粘り抜き、とうとうほとんどの代金を回収し切ったのである。そのときの彼は、私の目にはまさに「平和の使途」のように映じた。そして私は、何事にも「誠意」を尽くせる彼の人間性に深い感動を覚え、こんな友をもちえたわが身の幸せをしみじみと感じた。

もはや紙数は尽きた。しかし、これで稿を閉じては、ひとは「平和とそれ自身」「誠意それ自身」といった永田像だけを脳裏に浮かべたろう。付言しておかねばならない。

編集後記

永田さんは、病床にあつては、ほれ抜いてきた恋女房にわがまを言い、甘えもする。そんな「普通の人」でもあつた。
 (もちだ ゆきお 向日市在住)

この文章を書きながらこの号が皆様のお手元にとどく頃には伊拉克への武力攻撃が本当にはじまっているだろうかとの心配がよぎります。世界では有史以来の規模の市民による大反戦運動が広がる中で、

米英両国は国連へ事実上の武力攻撃を意味する新決議案を提出し、仏独露は事実上それを拒否する査察継続意見の覚書きで対抗する形勢です。戦争か平和か？いま世界は息づまるような緊張のただ中にあります。
 日本の小泉政権は明からさまに

燎 原 文 芸 黒 住 嘉 輝

『従横無尽』

すぐに涸れすぐに溢るる街川の
 人工というは底浅きかな
 なんとまあど派手なシャツと
 妻は言う
 バーゲンで求めしイタリアのシャツ
 扇状に斜面を埋めゆく墓苑
 死後なお人は地に縛られて
 ゼネコンへ税注ぎ込む受け皿の
 高速道路従横無尽

『子宝』

緑藻の腐りはじめし干潟続き
 ぼうぼうとして乾ける琵琶湖
 天井より落ちる冷たき
 湯のしづく
 たそがるる湖に封いて佇てば
 昏れ果てし琵琶湖見下ろす
 露天風呂
 曇るめがねを拭くこともなし
 子宝に今さら恵まれても
 困る二人
 「太閤の湯」なる朝の露天風呂

『足の踏場』

この値段でこれほど何でも
 作れるのか
 人ら混み合う百円シヨップ
 思い出をひきずるガラクタ
 捨てかねて
 二階の我が部屋足の踏場なし
 草喰める母牛の乳房鼻先で
 突き上げつきあげ仔は乳を飲む
 読み切れぬ書物本棚に
 ぎっしりと
 詰まりいてよはい傾くばかり

アメリカの武力攻撃に追隨する姿勢です。もし武力攻撃となれば、今度は湾岸戦争の時のようなイラク・クウェートの国境紛争と長距離ミサイルのピンポイント攻撃とは様相をことにし、四〇〇万の人口をもつバグダッドを目標した大地上戦となるでしょう。罪のない多数のイラク人民のギセイはさげられません。その上、アメリカは湾岸戦争にならない、日本に対しては大きな戦費の分担を要求することは間ちがいありません。湾岸戦争の時はまだバブルの余波がのこっていました。だが今は大不況のまっただ中です。国民は戦費の分担を認めるでしょうか。日米軍事同盟に固執する自民党政権はいよいよ窮地におちいったように思えます。

会および会報については、
 左記へご連絡下さい。
 「事務局」
 〒六〇六一八一〇七
 京都市左京区高野東開町
 一―二三 第三住宅
 三三―三〇二 井手 幸喜
 TEL FAX
 〇七五―七二二―三八二三